富士火山形成史の再検討：南西山腹でのボーリング掘削調査

Restudy of the eruptive history of Fuji volcano, Japan: preliminary report of the drilling research at the southwestern flank

山元　孝広[1]，高田　亮[2]，宮地　直道[3]

Takahiro Yamamoto[1], Akira Takada[2], Naomichi Miyaji[3]

[1] 地調，[2] 産総研，[3] 静岡農試・海岸砂地分場

[1] GSJ, [2] AIST, [3] Coastal Sandy Area Branch, Shizuoka Pref.Agric.Exp.Stn

富士火山の形成史，特に古富士末期から新富士にかけての噴火層序を再検討する目的で，平成 11 年度から 1/5 万地質図幅「富士宮」の調査研究を開始した．今回の講演では平成 11 年度と平成 12 年度に実施したボーリング掘削調査の成果について報告する．

富士火山の形成史については津屋弘逵による一連の研究（津屋，1968；1971 など）や宮地（1988）により古富士火山・新富士火山からなる層序が確立されている．地質調査所では古富士火山噴出物や新富士旧期火山噴出物が主に分布する南西部の 1/5 万地質図幅「富士宮」の調査研究を平成 11 年度から開始した．この調査では 1)溶岩を対象とした津屋の研究とテフラを対象とした宮地の研究の層序関係の見直し, 2)従来の放射性炭素年代値の再検討, 3)ボーリングコアの解析を行うことにより，より高精度な噴火履歴を明らかにすることを目的としている．平成 11 年度には富士宮登山道路一合目付近（標高 920m）で深度 150m，平成 12 年度には富士宮市天母台（標高 520m）で深度 120m の掘削を行いコアを回収した．コアの解析は現在も進行中であるが，地表調査や放射性炭素年代と合わせこれまでに明らかになった事実は次の通りである. 1)富士火山南西山腹下には岩屑なだれ堆積物が広く伏在している．その層準は古富士泥流（土石流堆積物）と新富士旧期溶岩の間で，1.6～1.4 万年前に発生した．また，この岩屑なだれ堆積部は古富士泥流が主に地表に分布する富士川断層西の丘陵地には分布していない. 2)富士宮一合目では深度 26～140m に新富士旧期溶岩が 20 層存在する．最下位のものは地表の大淵溶岩，最上部のものは本村山溶岩に岩質が類似する．今回，これらの溶岩からは 1.4 万年前，8.7 千年前の放射性炭素年代を得た．旧期溶岩の活動開始時期は従来の推定よりも古くなる可能性が大きく，今後さらに年代値を増やす予定でいる. 3)富士宮一合目のコア最上部にある青沢溶岩からは，これまでの推定年代よりも若い 1570 年前の 2 つの放射性炭素年代を得た．その暦年は 5 世紀後半～6 世紀前半で，歴史噴火の産物であることが確実になった．